

脚本家

## 橋部 敦子さん

2024年10月から12月にかけて放送されたリーガルドラマ『モンスター』の脚本を担当された橋部敦子さんにお話を伺うことができました。会員の皆さんの中にも、ドラマの中の弁護士の描かれ方について気になっていた方も多くいるのではないのでしょうか。橋部さんには、終始、笑顔でインタビューにお答えいただきました。

聞き手・構成：中村 千之、富田 寛之



——橋部さんのご経歴では、証券会社や、ダンサーもされていたということですが、どういった経緯で、脚本家の道に進まれることになったのでしょうか。

私は東京の短大に行っていて、Uターン就職で地元に戻ったんです。

当時は、何になりたいじゃなくて、名前のある会社に入りたいと思いました。Uターンのため入社試験を受けられる会社のごくわずかだったので、とにかく一番最初に受かったところに入ろうと決めて、それで入りました。ダンスは、体重が増えてしまったことがきっかけで、お金を掛けずに体重を落とすため、親戚のジャズダンス教室に行くことにしたんです。そこに通っているうちにダンスにはまっちゃいました。証券会社を2年半で辞めて、また東京に戻って、ダンサーになりました。

——ダンスのお仕事は、具体的にはどういったものをされていたのでしょうか。

ショークラブのステージ、歌番組のバックダンサーなどもやりましたが、1年か2年もしないうちにひざを痛めてしまい、プロとしてやっていくための稽古を続けることは無理だと医者にも言われダンサーを断念することになりました。そうしたら、知り合いが小劇団を立ち上げるとなって、歌とかお芝居、ちょこちょこ体を動かす程度のダンスは続けられたので、ゆるい感じで1年ぐらい続けていたら、公演をやろうということになり、そのときに脚本を書いてくれと言われました。

経験のないまま脚本を書いて、そのまま本当に舞台に上げたんです。その脚本で。来場者にアンケートを取ったら、「客をばかにした脚本だ」とか言われちゃって。

——すみません（笑）。

じゃあ、ちょっと勉強しようと思って、脚本を学ぶため学校に入りました。映像脚本の学校に行ったら、これは面白いとのめり込んでいきました。

——脚本を書く際は、ドラマとか映画、演劇など完成した場面を想像しながら執筆していくのでしょうか。書き手として、小説との違いはどのようなところにあると感じていらっしゃいますか。

私は、小説は書いたことがないですが、脚本は、どなたが演じるか、どなたが演出をするか、どんな音楽を付けるかで、世界観ができていくので、それは私もできあがったものを見るまで分かりません。どういうお芝居をするかというのはぼんやりとしていて、実際、頭の中に浮かべた通りにお芝居をしてくださるとは限らないので、何となくゆるい感じで頭に浮かべながらやっていきます。連続ドラマは、例えば全部で10話ある場合、台本を全部書いてから撮影が始まるということもありますが、そういうのは少なく、大抵、まだ全話脚本が完成しないうちに撮影が始まってしまいます。ですから、1話ができあがったときに、連続ドラマの後半をまだ書いているみたいな場合があります。そのような

ときに、第1話の完成を見ることができると、その後の執筆はその世界観であったり、「あ、この役者さんだったら、このセリフをこういう感じで言うんだな」とイメージがよりくっきりするので、それをイメージしながら脚本を書きます。

——影響を受けた作品などはありますか。

もともとドラマや映画が好きで脚本家になったわけではないので、作品もほとんど見ていませんでした。脚本家になった時点で、まったく自分の中に引き出しがなく、脚本家の仕事をしながら、作品も見ようになりました。例えば、友情ものだったら、名前が出ないんですが、何かボブスレーのやつ、ありましたよね。

——『クール・ランニング』。

そうそう。ドラマのプロデューサーや演出家との打ち合わせで、例えば、『クール・ランニング』みたいなとか、話に出て、みんなは「ああ、そうだよね」となるんですが、私だけはその作品が分からない、ついていけないので、帰ってすぐに、当時はレンタルビデオ屋に借りに行って作品を見ていました。

——『僕の生きる道』ですと、台詞と、登場人物がとてもマッチをしている印象を受けます。最初からキャストは決まっていたのでしょうか。

何も内容が決まっていなくて、「いついつの時期ぐらいに、何か一緒にやりませんか？」と、もうまったくゼロからの場合もあります。そのときどきで毎回違うのですが、『僕の生きる道』のときは、「草彥剛さんと余命もの」という前提でお話が来しました。

——なるほど。そうすると、それを軸に、ほかの登場人物とかも、ストーリーの中で作り上げていって、それに合うキャストは、テレビ局や、関係者の方で選んでいくのでしょうか。

はい。やっぱりどんなイメージの人物にしたいかということも話し合いながら、キャスティングが決まっていきます。

——その後の『僕』シリーズも登場人物を生かしながら、企画をしようみたいな話になったのですか。

『僕の生きる道』をやったとき、最初から3部作をやるということではなく、1作目の『僕の生きる道』をやって、反響もあり、視聴率的にも良かったので、「同じチームでまたやりたいね」という話になりました。そのまま『僕と彼女と彼女の生きる道』も評価をしていた

だけだったので、「じゃあ、またそのチームでやりましょう」ということで続いていきました。

——橋部さんが脚本を書かれる中で、最初の入り口は、企画とかいろいろあると思いますが、「こういうことを伝えたい」というテーマのようなものはあるのでしょうか。

どちらかというと、キャラクターを一個一個、丁寧に書いていくうちに、何となくやりたいことが浮かび上がってくるという感じです。これを言いたいがためにやるという、そんなに明確なものではなくて、話の枠組みとか方向性とか、こんなエピソードを入れられたらいいねということを作っていくうちに、「この題材を使ってこれができるんだな」とか、後でふと気づく、という感覚でしょうか。

——橋部さんの作品の中で、キャラクターが徐々に成長していく過程が描かれているように思うのですが、キャラクターを書いているうちに、自然に変わっていくのか、こういうふうに変えていこうという狙いがあるのか、いかがでしょうか。

例えば、『僕と彼女と彼女の生きる道』だったら、仕事人間だった人がそうでなくなっていく過程を描くので、徐々に、娘との関係性が縮む、少しずつ変化させていくためのエピソードを考えます。

——『僕と彼女と彼女の生きる道』では親権者変更の審判が描かれていますが、最終的に離婚しても、子供の両親として一緒に子育てをしていこうと、関係性を持っていくところが素晴らしいなと思いました。離婚しても両親と一緒に子供との関係性を維持して育てていこうという観点から、共同親権についての新たな制度が4月から始まりますが、橋部さんの中で、ドラマで描かれた、離婚しても子供との関係性を両親でというのは、やはりあるべき姿だと思われているのでしょうか。

当時はドラマのセオリーで言うと、いい父親に変化していく主人公が裁判に勝つという流れがみんなの期待するところですよ。けれども、母親の方だって、家を出ていかざるをえないところまで追い詰められてしまいましたが、やっぱり1人ですごく子供のことを思って子育てをしていた事実があるわけで、これをなかったことにはできなくて、あのような結末（親権は母親が取得。子育てについて離婚後の両親が歩み寄っていく）にしました。

——橋部さんはご自分の作品を見返したりされますか。

あまり見返さないですね。同じような題材をやると

きは、脚本が似ないようにするため、前の作品で確認することはありますが、基本的には過去の作品はあまり見ません。ただ、たまにうっかり見ちゃうことがあるんです。夕方か何かに再放送でやっているのをたまたま見て、何かそのまま見だしたら、「え、これ面白いじゃん」となり、当時は何をあんなに「だめだ、だめだ」と思っていたのかと不思議に思ったり、「今だったら、こう書かない」とか思ったりします。

——私が拝見した作品かもしれませんが、橋部さんの作品は、最後に決定的な答えを誰かが言って終わるというより、「そうだよな」という感じで、見ている人が考えるような余地が残されている印象があります。そのあたりは、何か意識されているのでしょうか。

どちらかという、「こういうことがこのドラマで言いたい」という押し出し方はあまりなくて、一応こっちがその物語に込めたいことである思いはちゃんと込めるけど、どう受け取るかはやっぱり見ている人に委ねている作品の方が多いと思います。そもそも正解が分かりづらいことを扱っていたりする場合もあると思いますが、「これが言いたかった」という感じの作りには、多分していないものが多いと思います。

——お医者さんのドラマや、弁護士のドラマなど、リアリティーを持たせるために何か工夫をされているというところはありますか。

専門的なお仕事の人が出てくる場合は、監修の方に相談しながら脚本を作りつつ、作った脚本に必ずチェックを入れていただきます。「ドラマ的にこうしたいんですけど、法律的にとか、医学的にどうですか？」と聞いて、実際にはなかなかないけど、ドラマとして見たときに、ぎりぎりあるかないかというジャッジをしていただき、ぎりぎりあるものはドラマでやったりしますが、「いや、それは絶対ないです」と言われたものは基本的にやらないですね。

——『モンスター』という作品ではSNSなど現代的な問題も取り上げられていらっしゃいます。SNSなどについて、もっとこうあるべきじゃないとか、橋部さんは何かお考えはありますか。

あんまり、こうあるべきとかはないです。ちょっと話がずれるかもしれませんが、最初、『モンスター』というのは常識破りの弁護士を示すものでした。ですが、書いていくうちに、人間の中に潜んでいる得体の知れないもの、罪を犯してしまうような、それもモンスター

なんじゃないかというように広がっていきました。そういう、「この物語上、モンスターって何？」と考えたりする中で、SNSで踊らされて、不確かな情報に乗っかって行動してしまう、そういう空気もモンスターだなと感じました。ですから、「SNSはこうあるべきだ」ということまでは考えていなくて、「こういう怖さもあるよね」と提示した、という感覚に近いです。

——『モンスター』に登場する主人公の弁護士ですが、橋部さんの頭の中では何か具体的なイメージはあったのでしょうか。

ちょっと得体の知れない感じにしたいというのがありました。法律家、弁護士というと「法の下に」となるのでしょうか、ちょっと法を上から見ているというか、あくまで法をツールとして使って、よい方向に動かしていくみたいな人にしたいと考えました。

主人公にあえて説明がつかない言動をさせ、趣里さんが、その「分からなさ」も含めて演じてくださったので、ああいうキャラクターになりました。同じ台本でも本当に趣里さんだからこそ、ああいう強いキャラクターになったのだと思います。

——弁護士に対するイメージ、こうあってほしいというメッセージはありますか。

脚本家は、この人をどう描こうかと登場人物、個人と向き合うことで、時代や社会に対し価値観を問い直してみたいことがあって、私はそういうことに最近意識があります。弁護士さんもクライアントさんというか、その個人を救う、守るということを通して、時代や世の中に対して価値観とか基準を問い直すことをやっていらっしゃるんじゃないかと思います。全然アプローチも立場も違いますが、世の中の価値観とか基準を問い直す、問い続けるみたいなことは、脚本家も弁護士も一緒というか、何かそういうことは、仕事も違うけれども、問い続けることをしていけたらいいなと思っています。

——どうもありがとうございました。

#### プロフィール はしべ・あつこ

1966年愛知県出身。学習院女子短期大学卒業。1993年に『悦びの葡萄』で第6回フジテレビヤングシナリオ大賞佳作を受賞、1995年脚本家デビュー。主な作品に、『僕の生きる道』『連続テレビ小説 ファイト』『フラジャイル』『僕は奇跡でできている』『6秒間の軌跡〜花火師・望月星太郎の憂鬱』『モンスター』など。2005年『僕と彼女と彼女の生きる道』で第13回橋田賞受賞、2021年『モコミ〜彼女ちょっとヘンだけ〜』で第39回向田邦子賞受賞。